

マオリの島の片隅で

管啓次郎

滞在記であると同時に滞在記の批判でもあるような文が書けるなら。だがそもそも滞在記を書くには、先立つ滞在が必要だ。滞在の「記述」を問題にしようとするとき、ぼくにはアオテアロア＝ニュージーランドへの一年間の滞在について書きはじめるしかなかった。

反復をどう書くか？

旅行、滞在、生活。そう並べてまず頭に浮かんだのは、ガートルード・スタインのこと。といっても、ユダヤ＝ドイツ系アメリカ人だった彼女の、幼児期の贅沢なヨーロッパ旅行や、成人後の長い長いフランスでの生活を思い浮かべたのではない。よみがえってきたのは、彼女のあの異様な、すばらしい、驚くべき文体の印象だ。

手元に本がないのでいまは実例があげられないが、たとえば『どう書くか』How to Writeというクレイジーな作品を、機会があればぜひ見てください。使われているのはおおむね平易な単語ばかりなのに、その崩壊したシンタクスのせいで、いった

い何をいおうとしているのか、まるでわからなくなる。言葉が渦巻いている。語の反復がひどく多い。つながりがよくわからないが、ともかく文はぐんぐん進行する。彼女はたぶん言葉にむかって、そんなに気前よくわかりやすくなりたくないんだよ、と論しているのかもしれない。文というものは、事態や事物に、あるいは思考にさえ、そんなにびったりといくはずがないのだと。文をつむぐときには、ちょっと進んでは足場をたしかめ、その不安定な水にはたして体重をかけていいものかどうか、まるで一步ごとの賭けみたいな気持ちで進んでゆくしかないのだと。一面が塩の湖のように凍った冬のチャールズ河の川面を、おそろおそろ歩くみたいに。でもその危険に、大部分の人は大部分の文において気づかない。

「旅」について書くことと「生活」について書くことのちがいが気になる。ぼくは旅行記にずっと興味をもってきたし、自分でもときどき旅を書いてみた。そうした文は多くの場合、与えられた制約¹¹紙数の中で、旅の経路やできごとの継起を律儀に追いながら書かれることが多い。するとわかりやすくなるし、臨場感が出る。でも当然、その影で、実際にあったこと起きたことの多くが切り捨てられ、忘却のうちにしずんでゆくだろう。この世への再臨が許されず、さびしく消滅してゆく光たち。そして語りの都合上、もともとの体験の場にあつては意識されていなかった主題が前面に出てきて、プロットをきれいに支配する。旅はあった、たしかにあった、みごとに記述された。でも旅はいつだって、それだけではなかった。

旅の記述は反復をきらう。スーダンの奥地でフィールドワークをおこなった、ぼくが敬愛する人類学者のすばらしい思い出話。彼は一家で調査地におもむいた。子供たちはまだ小さい。交通手段に非常に乏しい地方なので、一家はタマネギを満載したトラックの荷台に載せてもらうことになった。すぐれた乗り物とはいえない。タマネギにカバーをかけても、揮発性の匂いが立ちのぼってくる。とめどなく涙が出る。車はビュンビュン飛ばし、強い風がたえまなく吹きつける。子供たちは疲れはて、揺られながらうとうとするのだが、眠りこめば荷台から転げ落ちてしまうだろう。人類学者は感情とは無縁の即物的な涙を流しつつ、眠気をこらえ、子供たちを両手で抱きかかえ、うずくまる。トラックは進む、きょうも、明日も、あさっても。道は単調で、風景に変化はなく、時間はある種の飽きのように退屈に伸びてゆくばかりで、事件はそれ以上にも以下にも起こらない。タマネギは少しずつ餿えてゆく。荷台、タマネギ、涙、睡魔、危険、アフリカの大地。わかるのはこの大陸のすさまじい巨大さだ。そんな

日々が、たとえば五日間にわたってつづいたとしても、おなじ記述を五日分つづけることを旅行記は許さない。

そう、「旅」という短い区切りですら、そうなのだ。「生活」はどうだろう。生活の本質は反復、それが安定であり、安心をもたらし。ところがいざ生活（日常）について記そうとするとき、人は反復を回避する。どうしても「発見」と「事件」（非日常）が中心となる。それが文学的都合。ページごとに発見と事件の記憶が刻みこまれてゆくとき、読む人は「すばらしい生活記だなあ」と感心することだろう。けれども、と、ぼくはつぶやく。生活だよ、いいかい、生活の話をしてるんだよ。そんなに毎日毎日、発見があったのか、事件があったのか？ 生活記として書かれる文章のうちつまらないものは、だいたいひどくわざとらしくて、作り事めいていたり自慢話めいていたりして、芬々たる臭気につつまれている。卑俗で、平凡。ある種の倦怠感だけは読む者に保証してくれる。それに対して、「おお、これはなかなか読ませるじゃないか」という生活記だって、たとえば突拍子もない事件を背景としたり、あるいはエグゾティックな知識のピースをちりばめて読者の興味をかきたてる点で価値があるということが多い。もちろん、悪いことではない。しかしぼくには、いずれも多くの場合、あらゆる「生活」を支配する根本的な反復性を避けているように思えてならないのだ。ひどい生活記も、よく書けている生活記も、生活時間の大部分をしめるありきたりな反復の時間をあっさり忘却し、おもしろおかしくスリリングに話をまとめようとする。「生活」が、きれいにさばかれ、陳列用の肉塊になる。そして「記」が生まれる。

生活につきものの反復とか、試行錯誤とか、やりなおしや再出発とか、それでも日々のもたつきの中に忍びこむ小さな発見を、そのまま書くことができたなら。単に日記という形式を採用するだけでは足りない。文そのものを変貌させたい。それはたぶんひどく読みにくくまとまりのない、ガートルード・スタインの文章みたいに異様な、破壊されたシンタクスのつらなりになるのかもしれない。けれどもそれが、逆に「生活」に迫ることもあるだろう。生活の真実をうかがわせることもあるだろう。そんな文章を書くことは夢想にすぎないかもしれないが、その焦れたい夢想の影で、生活はいつもすでにはじまっているのだった。

なぜよそではなくそこへ?

シンタックスの破壊は、ここでは試みない。

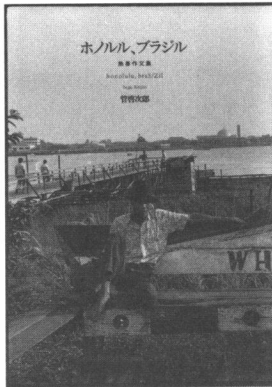
旅行と生活とは、ある程度連続してはいるかもしれないが、はっきりした断絶もある。人によってちがうだろうが、ぼくにとっては、気持ちの上で歴然とちがいがあ。一晩か二晩、せいぜい数日で次の場所へと移動してゆくような旅は、ぼくは最長でも三か月くらいしかしたことがない。それはひどく疲れる生活様式だ。反対に、「住んだ」というためにはやはり最低でも半年、その土地の年間最高気温と最低気温を経験するくらいの長さの滞在が必要だと思う。すると生活の単調な反復もたっぷり味わうことになり、知っても知らなくてもいいその土地の細部が、しっくりと、避けたく、自分に浸透する。

ところで、今回ばかりは、ぼくはどこに行っても住んでもよかった。選ぶのは完全に自由。信じられない話だ! 考えられないほどの贅沢! それは職場が認めてくれた一年間の研究休暇のおかげだが、この一年に未知の土地へと出発することはその何年もまえから楽しみにしていた、どこにゆくべきかについて、ずいぶん迷っていた。「研究」などとおおげさにいっても、ぼくがやっているのはスーツケースひとつで持ちこざる数少ない本(主に現代の文学作品)をよくわからないままに少しずつ読み進めてゆくことだけで、それは窓ぎわのしずかな机と筆記具が確保できるなら、世界のどこにいてもできる。巨大な図書館で書物の迷宮にまよいこめば気が散るし、インターネット時代にあつては本格的な書店街もいらない。情報中枢というべき北米の一流大学にゆけばたしかに論文めいたものを書くには便利だったろうが、その施設や人的環境をほんとうに生かすだけの力がこつちにあることもわかっていた。カナダ、特にモンREALには強く惹かれていたが、アメリカ合衆国にはいまはもう住みたくなかつた。それにヨーロッパよりは、南半球。ぼくはヨーロッパが世界に対して働いた過去五百年の暴力に、ずっとわりきれない気持ちを抱いていた。南半球では、ブラジルを中心に一年間をすごしたことがあり(すでに二十年前の話)、そのとき毎日北に出た太陽のおかげで自分の人生が基本方位を変えたことは、よろこばしい記憶だった。ぼくは陽光や雲、植生や動物たち、そして何

かの機縁でその土地に集まることになった人々の日常生活を、その片隅から眺めたかった。

南半球は動物も植物もちがう。その魅力には抗したいものがある。妻と息子が英語圏を希望していたせいもあって、結局、最後まで候補地として残ったのはオーストラリアとニュージーランドのいくつかの都市。メルボルン出身でバリを拠点として活躍する美術批評家のルイーズ・ネリに、Eメールでたずねてみた。「シドニーとメルボルンとオークランドとウェリントン。どこがいちばんいい?」彼女の答えは簡単だった。「ぜんぶおもしろいわよ!」シドニーとウェリントンでは街の規模はぜんぜんちがうが、どちらも捨てがたい味がある。それぞれに活気ある現代美術のシーンが成立していて、それぞれに洗練があるらしい。じつはぼくの頭の中では、これ以外にオーストラリアではダーウィンとアデレードとホバート、ニュージーランドではダニーデンも可能性として上がっていた。といっても、すべては曖昧なイメージの世界。どこもまだ名前でしかない。断片的なごくわずかな情報が、頼りない初雪のように目のまえをちらちら舞っているだけ。その動きに、ぼくは動きの鈍い海底の魚のように誘惑されていた。地名がぼくのフェティッシュ（いわれなき執着の対象、呪術的なお守り）だった。それぞれの都市名は、何かそれぞれにまったく新しい経験・景観・視界を準備してくれるように思えた。そしてそう思うこと自体は、完全に正しい。

ある糸を見つけ、それがあるとき手放し、またあるとき再発見して、ふたたびたぐりはじめる。その間の時間の谷間は、ときには数年にもわたる。一貫性をもつだけの知力に欠けるべくにとって、読書生活はそんなふうに関欠泉みたいになるのが普通で、



管啓次郎『ホノルル、ブラジル——熱帯作文集』インスクリプト、二〇〇六年

読書にかぎらず生活上のさまざまなジャンルで、この断続の傾向がしばしば現われた。ひとごとみたいにいってはいけない、その性格がぼくの人生の道連れだった。もっともこれは消費社会が生む、ありふれた人間類型、行動のパターンだ。一貫性が一日のうちですらたやすくとぎれ、すべてが並列される。価値の位階が崩れ、自分自身が何か索引のようなものになってしまふ。準備されたアイテム群は、うわべで見る限り、気分次第でとりかえのきくものになる（じつはそのとりかえの中にすでに自分の強迫観念が現われているのだが）。そんな気ままさはすさまじい頹廃だと思えるけれど、それを頹廃と呼ぶ代わりに「並列」をもって楽しみの源泉と思ひこむのが、情報Ⅱ消費社会の子の抜きがたい性癖なのだった（ロックとボサノヴァとモーツァルトと奄美の島唄を同時に楽しめるのは、はたしてほんとうにそれほどいいことなのか？）。客観的には度し難い頹廃と見えるものに、自分だってすっかり飲みこまれていく。そうやって何かを買い、物だけでなく経験すら買いそろえて、でき上がるのは奇妙なパッチワークの外見をもつ、誰も楽しませないさびしい道化でしかない。

ぼくがしばらく見失っていた糸とは「ポリネシア」だった。かつてハワイ大学に在籍していたのは、ちょうどハワイ先住民の権利回復運動がもりあがりを見せてきた一九八〇年代後半で、ハワイ語だけで運営される幼稚園プーナ・レオ（「言葉の巢」）の活動はすでに軌道に乗っていた。プーナ・レオがお手本としていたのは、ニュージーランドの先住民マオリ人のマオリ語教育の場であるコハンガ・レオ。ポリネシアと総称されるまばらに点在する島々は、ハワイ諸島、ソシエテ諸島、そしてアオテアロアⅡニュージーランドを三つの頂点として、地球の水半球の上に巨大な見えない三角形を描いている。ぼくはかつてハワイに住み、タヒチにも旅行したことがあった。第三の頂点にも、いつかは行きたいと思っていた。そんな夢を端緒として、この島のことを調べはじめると、これがひどくおもしろいのだ。

そこは公式に二言語二文化の国だ。マオリ系の人々は人口の一割を優に超える。そこに太平洋諸島から多くの移民が加わって、オークランドは現在では「ポリネシアの首都」と呼ぶにふさわしい島人たちの都市となっている。反核国だ。アメリカの原子力船の寄港を認めないためアメリカとの関係が悪くなったが、気にしない。原子力発電所はない。世界で最初に婦人参政権を認めた国家であり、義務教育の無償化でも世界にさきがけた。教育の充実ぶりはいまでも目をみはらせるものがあり、成人ならば希



マオリの島では、いたるところでマオリの顔が露出する。〔撮影：菅——以下同〕

望者全員が大学に入学できる。その妥協なき福祉国家ぶりは二〇世紀をつうじて大いに他の国々から称賛されたが、一九七三年のオイル・ショックとイギリスのＥＣ加盟以後、翳りが見えてきた。一九五〇年代前半のある時点では、国民ひとりあたりの所得が世界一の金持ち国だった。いまはヘッジファンドの投資が集中してニュージーランド・ドルが高く、消費もさかんで表面的には好況のように見えるが、じつは経済状況はよくない。それでもアジア系、太平洋系のみならず、東欧・中欧・中東からも移民が押しよせていて、最大都市オークランドは本格的な多文化都市＝世界都市に変貌しつつある。ニュージーランド自体、アジア太平洋国家としてみずからを再定義する試みを、この四半世紀ほどつづけてきた。日本に比べると、人々のメンタルな地理学の中で、ニュージーランドはオーストラリアの付属物みたいに考えられることが多い。でも二つの国は、まったくちがう。島大陸とニュージーランドを分かť荒々しいタスマン海は日本海の数倍は幅があり、動物相も植物相も、まるでちがう。こうした小さなイメージ情報が頭の中でしきりに点滅をはじめにつれて、いつしかぼくはニュージーランドにゆくことを決めていた。最大の理由を正直にいう。森や海のそばで暮らしてみたかったのだ。

ノースショア、鳥の人々

人は生活の行程を自分で決められると思っていたが、じつは自分で決められることなんてわずかでしかない。「決定」が起こるのはつねに人と人との間、作用と反作用の間のこと。関係群が、ときほぐすことのできない交渉をいつのまにかはたして、各項に動きを指示する（そのひとつが「私」）。「自分」とは分割された何かの取り分にすぎない。それでも、最初の作用（アクション）を起こさないかぎりには、何も起こらない。

オークランド大学比較文学科のチュアにEメールを書くことにした。マイケル・ハンはオックスフォード出身のイギリス人で初老のイタリア文学者だが、移民や亡命者の文学に関心をもち、二年ほどまえに「亡命の詩学」を主題とする国際シンポジウムをこの大学で開催していた。古典古代の哲学者のような柔和な風貌をしている。ぼくが過去の仕事について書き送ると、マイクはただちに大歓迎してくれた。翻訳やエグジログラフィー（亡命や流浪や移民の経験を書く文）をめぐるわれわれの興味は、あまりによく重なっていた。大学はぼくをhonorary visiting professorとして正式にうけいれ（ただしhonoraryとは「無給」のこと）、研究室とコンピュータ、図書館の使用権を無償で貸与してくれることになった。決まった義務はない。大学院のゼミに参加して毎学期二、三度の話をする、そして大学のアジア研究科で講演をすることが、口約束みたいに決まった。

家がすぐに見つかったのも幸運だった。まだ東京にいるあいだに大学新聞の広告をオンラインで見ると、四月から一年間限定で家族用の住居を貸したいという物件があった。場所はオークランドから湾を隔てて北にわたった郊外、ノースショア。家主のクレアはアメリカ人の教育心理学者で、これから北海道大学に研究にゆくのだという。夫のビルはイギリスで博士号を取ったキウィ（ニュージーランド人）の数学者。娘のポビーはまだ十一歳なのに、もう高校の数学を終わろうとしている。かれらの大きな家をそっくりひきついで、ぼくと妻子にとっての生活という名の反復がはじまった。

すばらしい反復だった！ 家は海岸の丘陵にあり、住宅地とはいっても周囲にはまだまだ森が残っている。起伏の多い地形、

斜面や谷間は手つかず。巨大な木々が庭先にあり、バナナがなり、柑橘類がなっている。大きな羊歯が葉をひろげている。見たことのない植生だ。広い木製のデッキに立てば、ジャングルみたいな景色を超えて、ダウントウンの街並がちょんぼりと海のむこうに見える。たくさん野鳥がやってきた。トウイは小振りな黒っぽい鳥、白い飾り羽根のどもとにあり、いろいろな鳥の鳴き声をまねる。ときおり、まるで犬の吠え声のような鳴き方をするときもある。ケレルは大型のヤマバト。日本の都市鳥である鳩よりはるかに大柄で、美しい緑色が混じっている。木の枝にとまれば、枝が重みでたわみそう。ロゼラは黄緑にあざやかな赤の頭をした、オーストラリア原産のインコ。しばしばついでに行動し、森の緑を見ていると、ときどき視界のすみを赤い花が飛び過ぎたように思うときがある。数カップルが止まると、木に花が咲いたようだ。ブラックバード（体が黒、くちばしがオレンジ）やファンテイル（白い尾羽を扇のようにひろげる）やマグバイ（黒と白のきれいな組み合わせのドロボウカササギ）は、どれも北半球にもいる。家から十分ほど歩いて海岸近くの湿地帯にゆくと、プケコがいた。あざやかな青い体に赤い頭、長い脚で湿地にすくと立っている。別の方角に歩けば、やはり海岸に巨大だが可憐なピンク色の建物があり、それは「チェルシー」という名の砂糖工場だった。フィジーでとれた砂糖黍を原料として、ここで白砂糖に精製し、かつてはイギリスに出荷したのだ。この工場には池があり、池は海と人工の石積みのできで隔てられているだけなのに、両者の水面に数メートルの落差があるのがおもしろい。しかも潮の干満とともに海面の高さが変わる。池にはこれもオーストラリア原産のブラック・スワンやたくさん鴨が住んでいて人にパン屑をねだるが、人の手が届かない側には大きな白いヘロンが水辺の木々に営巣している。そして海にはカモメ。鳥たちはこうして見ると種類が多く、鳥の人々のおりなす多民族の共和国のように、このおなじ土地で重なり合いながら生きている。さまざまな食性をもつということは、おなじ土地で生きてゆけるということでもある。鳥と森はいつももちつたれつ、植物が鳥に食料を提供すれば鳥はその種子をせっせと運び森の拡大に協力する。鳥と森とは一体だ。そんなあたりまえのことさえ、カラスとハトばかりの灰色の都市に住んでいるとわからなくなっているのだ。

森の濃い土地だ。家からスロープをあがって、歩いて五分。尾根を走る舗装道路のむこうには「ブッシュ」と呼ばれる森がひろがる。手つかずの森、整備されたトレールができてはいても原生林の雰囲気をよく残した広大な森だ。そこにはじめて足を踏



巨大な羊歯ブラック・ファーンが、この島のブッシュ（森）の魂だ。

み入れたときには、思わず子供たちと歓声を上げた。それから毎日歩きに行った。小川があり、滝があり、落ち切ったところで流れは緩慢になり、やがて湿地帯がひろがり、最後にぽかりと開けた海岸に出るのが、その水の圏域のどこに位置するかによって、植物のようすが遷移する。目立つのはやはり羊歯、ブラック・ファーンだ。その大きな葉蔭にいと、まるで自分が先史時代の無言の生物に転身したように思えてくる。カウリの大木があった。まっすぐな幹の非常に背が高くなる樹で舟作りの材料とされ、その樹脂は琥珀のようで舟の防水に使われ装飾品にもなった。キャベッジ・ツリーと呼ばれる、尖った葉が密集していくつかの球を作るようにはえる、どことなくトロピカルな樹もあった。ぼくの印象では、この土地はちょうど以前に住んだ二つの土地、シアトルとホノルルを足して二で割ったもののようには思えてならなかった。太平洋岸北西部のシアトルは温帯雨林の土地、緯度のわりに温暖で雨の多い土地だ（雪はほとんど降らない）。ホノルルはいうまでもなく熱帯の島、やさしく貿易風が吹き、雨の多い土地だ。どちらも緑が濃く、樹木がでかい。そしてここニュージーランド北島のオークランド周辺には、温帯的な巨木と熱帯的な巨木が混在し、毎日めまぐるしく変わる海洋性の気候のもと、やはり雨が多く、緑はいきいきと濃かった。

海はいつもそこにある。この地方は不思議な地形で、太平洋側とタスマン海側の両方から海が大きく陸地に食いこんで、陸地は激しく狭まっている。出入りの多い海岸線に、数えきれないほどの島々。北島はマオリの伝承名ではテ・イカ・ア・マウイ、「マウイの魚」と呼ばれる。ポリネシア全域の文化英雄マウイが、海から釣り上げた巨大な魚がのたうち、そのままの姿で固まってぎざぎざの山々をもつ島になったというのだ。気候は西から変わり、雲がすごい速さで飛んで、強い雨と快晴が一日に何度も交替した。嵐になれば停電し、家の裏手の崖に小さな滝ができた。心は気温や湿度の変化に敏感になり、気力は充実した。ハワイのオアフ島ではノースショアといえはサーファーたちの聖地、冬には巨大な波が押し寄せて敬虔な巡礼のように世界中から波乗りたちが集まる。その北には兇暴な北太平洋がひろがるだけだ。けれどもここニュージーランドの北島では、ノースショアといえはオークランド市の北に海を隔ててひろがるできたばかりの大きな市をさし、ここからふたたび陸地がしばらくつづき、北上すればするほど熱帯の雰囲気が濃厚になってゆく。やがて最北端のレインガ岬にたどりつけば、そこから先ははてしなく、ものしずかでパワフルな南太平洋なのだった。



ランギトト島。オークランド北東に美しく浮かぶ。



海と都市はひとつ。海から見たターマキ・マカウラウ（オークランド）。

バーケンヘッド、マオリ語

夏。小学生の娘とぼくは毎日フェリー乗り場に行って、小さな魚をすくって遊んだ。バーケンヘッドのフェリー乗り場は住宅地のはずれにあり、一時間に二本、ダウンタウン行きの船が出る。ここからはハーバーブリッジの下を通って十分あまりの小航海だ。海はエメラルド色で水は意外に冷たく、風が強い日には波が白く飛んで通勤船は揺れた。橋には国旗がはためき、高い橋梁から海面にむかってバンジージャンプをする命知らずもいる。バンジージャンプはこの国ではじまった遊びで、頑固で無口なニュージーランド人は、なぜかこうした極端な遊びが好きだった。ダウンタウンにこんなに近いのに、そして水はかなり冷たいのに、島人系の子供たちは平気でフェリー乗り場で泳いでいる。船着場には体長三、四センチの小さな魚の群れがいくらでもいて、影でさとられないよう垂直に網をふりおろせば、いくらでも捕れた。バケツに二十匹ほどたまったら、そのまま水ごと海に

戻した。そうしているとバケハ（白人）やインド系や韓国系の親子連れが見物にきて、なんとなく立ち話をはじめることにもなる。ここから岬をまわりこんだところにゆくと、浅い泥の海がつづき、マングローブ林があるのも珍しい。高層ビルの都会の対岸だというのに。干潮時には小舟がいくつも干上がった海底に斜めに立っていて、歩いて接近することもできた。この国には *boat* という単語があり、それは遊び用の小舟の所有者のこと。オークランドのヨットハーバーは世界最大で、ヨットから手漕ぎの小さなボートまで、この湾にはおびただしい舟がゆきかう。

見慣れない英単語は他にもたくさんあった。初日、はじめてスーパーマーケットに行って面食らったのは、ショッピングカートが *trolley* と呼ばれていること。そんな単語、初めて見た！ ノースショアの東岸沖にそのなだらかな山容がうっとりするほど美しく見える火山島ランギトトには「おもしろい *bach* がたくさんある」と聞かされたときにも、なんのことだか見当もつかなかったが、それは夏休みなどにこもりにゆく海や山の素朴な小屋なのだった。語源は独身者 *bachelor* らしい。スーパーマーケットでもうひとつ驚いたのが、「スウェーディッシュ・ラウンディング」というシステム。品物の価格は「セント」すなわち百分の一ドルまで決められているものの、流通している硬貨の最小単位は五セント。すなわち、それ以下は貨幣によっては表現しようがない。それで、合計価格の最後の数字が 8、9、0、1、2 ならそれを 0 とみなし、3、4、5、6、7 ならそれを 5 とみなす。そんな切り上げ切り下げルールのことを「スウェーデン丸め」と呼んでいるわけだ。これには感心した。でもそれがどこまでスウェーデンと関係しているのかは、どうにも謎めいている。「鯖を読む」と日本語がいうように、独特な「ニシンの数え方」でもあったのだろうか、あの遠い北の半島の国に。

やがて学校がはじまった。ぼくは大学にゆきマイクの比較文学の大学院セミナーに出るとともに、マオリ語初級をとりはじめた。子供たちはそれぞれ高校と小学校に通い、そこでもマオリ語にさらされるようになった。家族と一緒に数の数え方を覚えることにした。タヒ、ルア、トル、ファア、リマ。オノ、フィトゥ、ワル、イワ、テカウ。1 から 10 までのこの数字を、小学生は一日で覚えてしまったが、こっちは一週間がかり。毎朝、娘を小学校まで歩いて送りながら、一緒に数字を口ずさんだ。挨拶も覚えた。キア・オラ、こんにちは。パイ・アナ・キ・テ・トゥタキ・アトウ・イ・ア・コエ、お会いできてうれしく思います。

コ・ケイジロー・トーク・インゴア、私の名前はケイジローです。カ・キテ・アノ、また会いましょう。これでは、まるで一刻も早く別れたがっているように聞こえてしまう。もっとカジュアルにやりなおすことにしよう。

アタ・マリーエ！ おはよう。

ポー・マリーエ！ おやすみ。

キア・バイ・トラー！ よい一日を。

ぼくがとりはじめたのは夜間の一般向け公開講座、二十人あまりの学生たちは年齢も出自もさまざまだ。先生の名はアフィナ・ラウイリ。そして最初に覚えなくてはならないのは、何よりもミヒミヒ（挨拶）なのだった。

マオリの文化では自分の位置をはっきり名乗ることが重要だとされる。かれらの伝統的集会所であるマラエをたずねるときは、特に挨拶が大切だ。マラエとは楽しみの集まりから儀式からさまざまな決定の話し合いまで、コミュニティ生活の中心になる場。この挨拶でぼくが感動させられたのは、出身地、名前について、「私の山はどこ、私の川は何々」というかたちで、ある土地の中での自分の所属を明らかにしなくてはならない、ということだった。いたるところに山あり川あり、そして本来なら全土が森に埋もれていた日本列島の住民には、これはわかりやすい感覚だと思う。同時に、「なぜそれをわれわれは忘れてしまったんだろう！」という衝撃を与えられもする。挨拶はこんなふうに述べられる。

テーナー・コウトウ、テーナー・コウトウ、テーナー・コウトウ、カタア！ こんにちは、こんにちは、こんにちは、みなさん。（必ず三度くりかえす。）タラナキが私の山、ワイアタが私の川、ンガティ（「くの人々」の意味）パーケハー（「白人」のこと）が私のイウィ（部族）、私の名前はニック、私はポーネケ（首都ウェリントンのマオリ名）から来ました。だったら、ぼくはどう自己紹介すればいいのだろう。地上における自分の位置を、山（マウンガ）と川（アワ）との関係によってしっかり確認しておく必要がある。多摩地区に住んでいるので、「高尾山」と「多摩川」所属を名乗ろうか。そう決意すれば、日本でのいまの味気ない暮らしにも、どっしりとした地理的・神話の次元がつけ加えられる。

娘の小学校のクラスでは、同級生の子たちの元々の国籍があっというまに両手の指では数えきれなくなる。親友たちの出身国



ロシア、ボスニア、オランダ、インド、韓国、日本。小学校の教室はそのまま移民社会。

は、オランダ、インド、クロアチア、オーストラリア、韓国。ロシアの子、ボスニアの子、フランス（ニューカレドニア）の子もいれば、南アフリカからの移住者の子もいる。イラクの子、イランの子がいるし、フィジーやトンガの子もいる。担任の先生はオランダ・インドネシアの混血。こうした事態は、たぶん珍しくもないだろう。現代の「世界都市」はすべてが移民都市。出自来歴の異なった人々が隣あって暮らすのは、むしろ常態だ。けれどもそれがポリネシアの大三角形の一角で、マオリ語を象徴的中心としながら行なわれているのをまのあたりにすると、思わずきょとんするような感慨を覚えるのだ。ちょうど二〇〇四年にマオリ・テレビジョンが開局したばかりで、日ごろまったくテレビを観ないぼくが、ドラマ形式のマオリ語学習番組『コレロ・マイ』を毎晩観た。

小学校ではずっと新しい体育館を作っていた。父兄たちがボランティアで建築作業をやっているため、ずいぶん時間がかかった。それがあの日、完成し、生徒と親たちの希望者は、開館式に立ち会うことになった。集合時間は、夜明け、午前六時。それでも集まった四、五十人が円くなり、招かれた土地のマオリの長老（といってもぼくより若い）がマオリ語で祈りを唱えた。言

葉の意味はわからない、でも祈りの意味は完璧に理解できる。つぶやくような歌うような祈りが終わると、長老を先頭、イタリ
ア系の校長先生を二番手に、みんなでその場の「巡礼」をはじめた。木造建築の体育館の、一本一本の木の柱に、みんなで手を
ふれて歩く。子供たちの安全をお願いします、健康で楽しい学校生活をお願いします、と心でつぶやきながら。ぞろぞろ、ぞろ
ぞろ。あらゆる背景の、あらゆる肌の色の、大人たち子供たちが、眠い目をこすりつつ。マオリ語の祈りのもとに集いつつ。

この体育館では、やがて終業式も行なわれた。生徒全員とその保護者たちが集まれるよう、式は夜開かれる。校長先生の挨拶、
最初のひとこととしめくくりはマオリ語だ。それから全員で国歌を歌う。最初にマオリ語ヴァージョンを、ついで英語ヴァージ
ョンを。子供たちは子供の生物学的習性で、声をはりあげて歌う。およそどの国のそれでも「国歌」を好んだことのないぼくだ
が、認めよう。いろんな子供たちがみんなで歌うマオリ語の国歌に、このときだけはたしかに、ひどく胸を打たれた。

(いつかどこかへつづく)